

2023年5月14日(日)礼拝メッセージ

聖書箇所:エレミヤ書 16 章 1～21 節(エレミヤ書講解説教 34 回目)

タイトル:「主は生きておられる」

きょうは、エレミヤ書 16 章から学びたいと思います。タイトルは「主は生きておられる」です。14～15 節をご覧ください。

「それゆえ、見よ、その時代が来る一主のことば一。そのとき、もはや人々は『イスラエルの子らをエジプトの地から連れ上った主は生きておられる』と言うことはなく、ただ『イスラエルの子らを、北の地から、彼らが散らされたすべての地方から上らせた主は生きておられる』と言うようになる。わたしは彼らの先祖に与えた彼らの土地に彼らを帰らせる。」

「そのとき」とは、イスラエルの子らが、北の地、これはバビロンのことですが、バビロンから彼らの土地に帰るときのことです。そのとき、彼らは「主は生きておられる」というようになります。それはイスラエルの子らだけではありません。19 節には諸国の民とありますが、これは異邦人のことです。それを見た異邦人も、自分たちが先祖から受け継いだものは何の役にも立たない空しいものばかりであり、そのような神は神ではない。真の神はイスラエルの神、主であることを知るようになるということです。

I. 主を捨てたイスラエル(1-13)

まず、1～9 節をご覧ください。「1 次のような主のことばが私にあった。2 「あなたはこの場所で、妻をめとるな。息子や娘も持つな。」3 まことに主は、この場所で生まれる息子や娘について、また、この地で彼らを産む母親たちや、彼らをもうける父親たちについて、こう言われる。4 「彼らはひどい病気で死ぬ。彼らは悼み悲しまれることなく、葬られることもなく、地の面の肥やしとなる。また、剣と飢饉で滅ぼされ、屍は空の鳥や地の獣の餌食となる。」5 まことに主はこう言われる。「あなたは、弔いの家に入ってはならない。悼みに行ってはならない。彼らのために嘆いてはならない。わたしがこの民から、わたしの平安を、また恵みと、あわれみを取り去ったからだ一主のことば一。6 この地の身分の高い者や低い者が死んでも葬られず、

だれも彼らを悼み悲しまず、彼らのために身を傷つけず、髪も剃らない。7 死者を悼む人のために、葬儀でパンが裂かれることはなく、父や母の場合でさえ、悼む人に慰めの杯が差し出されることもない。8 あなたは弔いの宴会の家に行き、一緒に座って食べたり飲んだりしてはならない。」9 まことに、イスラエルの神、万軍の主はこう言われる。「見よ。わたしはこの場所から、楽しみの声と喜びの声、花婿の声と花嫁の声を絶えさせる。あなたがたの目の前で。あなたがたがたが生きているうちに。」

何のことを言っているのか訳の分からないような内容です。私たちは、13 章で、主がエレミヤに亜麻布の帯を買ってそれを腰に締めるように、そして、その帯をユーフラテス川の岩の割れ目に隠しておくようにと命じたことを学びました。覚えていらっしゃるでしょうか。エレミヤがその通りにすると、その帯はどうなりましたか。腐ってボロボロになりました。ボロボロの帯です。それはイスラエルの姿を現わしていました。エレミヤはそれを自分の行動をもって現わしたのです。これを行動預言と言います。きょうの箇所でもエレミヤは行動を通して語るように命じられています。ここでエレミヤは三つのことを命じられました。

第一のことは、妻をめとるな、ということです。2 節にあります。「**あなたはこの場所で、妻をめとるな。息子や娘も持つな。**」どういうことでしょうか。結婚するなということです。エレミヤの時代は結婚することは普通のことでした。特に旧約聖書を信じていたユダヤ人にとって、「生めよ、増えよ、地を満たせ」とか、「あなたの子孫を海の砂、星の数のようにする」という約束の実現のためにも、結婚することが祝福だと考えられていました。それなのに、ここで主はエレミヤに「**あなたはこの場所で、妻をめとるな、息子や娘も持つな。**」と言われました。どうしてでしょうか。

その理由が 3 節と 4 節にあります。「3 まことに主は、この場所で生まれる息子や娘について、また、この地で彼らを産む母親たちや、彼らをもうける父親たちについて、こう言われる。4 「**彼らはひどい病気で死ぬ。彼らは悼み悲しまれることなく、葬られることもなく、地の面の肥やしとなる。また、剣と飢饉で滅ぼされ、屍は空の鳥や地の獣の餌食となる。**」

子どもをもうけても、その子どもが虐殺されることになるからです。具体的には、バビロンがやって来て略奪するとき、その子どもたちは病気で死んだり、剣と飢饉で滅ぼされることになります。こうした悲惨な目に遭うなら、むしろ子どもを生まないほうがましだということです。

第二に、主がエレミヤに言われたのは、弔いの家に入ってはならない、悼みに行ってはならない、ということでした。つまり、葬式に参列してはならないと言われたのです。5 節にこうあります。「まことに主はこう言われる。「あなたは、弔いの家に入ってはならない。悼みに行ってはならない。彼らのために嘆いてはならない。わたしがこの民から、わたしの平安を、また恵みと、あわれみを取り去ったからだ—主のことば—。」

葬式は、いわゆる人生における大切な儀式です。当時、喪中の家に行かないことは、隣人に対する無関心と考えられていました。その葬式に行ってはならないということです。どうしてでしょうか。それは 5 節の後半にあるように、これはただの死ではないからです。神のさばきによる死だからです。神がこの民から恵みとあわれみを取り去られました。そのさばきによる死がありにも多すぎて、彼らの死を悲しむ者がだれもいなくなるのです。

第三に、神はエレミヤに結婚式などの祝宴に出るなど言われました。9 節です。「まことに、イスラエルの神、万軍の主はこう言われる。「見よ。わたしはこの場所から、楽しみの声と喜びの声、花婿の声と花嫁の声を絶えさせる。あなたがたの目の前で。あなたがたが生きているうちに。」それらの喜びが、一瞬にうちに取り去られるようになるからです。

いったい何が問題だったのでしょうか。それは、10 節と 11 節にあるように、彼らの先祖が主を捨て、ほかの神々に従い、これに仕え、これを拝み、主を捨てて、主の律法を守らなかったことです。皆さん、主を捨てるのが罪です。彼らの先祖も、彼ら自身も主を捨てて、ほかの神々に仕えました。主を捨てるのが罪なのです。

日本語のことわざにも、「捨てる神あれば拾う神あり」ということわざがあります。自分に愛想をつかして相手にしてくれない人もいる反面、親切に助けてくれる人もいます。だから、困ったこ

とがあっても、くよくよするなという意味です。これは、日本は八百万の神、神道の国だからこそ存在することわざと言えるでしょう。あなたを捨てる神があれば、あなたを拾う神もある。でも実際は逆です。神があなたを捨てるのではなく、あなたが神を捨てるのです。人間の方が八百万もある神々の中から都合のいい神を拾って、それでご利益がなく何のメリットもなければ捨ててしまうのです。

エレミヤの時代もそうでした。イスラエルの神、主と他の神々を天秤にかけ、自分たちにメリットをもたらしてくれる神を選び好みして拜んだり、必要なくなったら捨てたり、必要であればまた拾ったりしていたのです。忙しいですね。神々の方もたまったもんじゃありません。捨てられたり、拾われたりと、人間様のご都合によってあしらわれるわけですから。

でも、主を捨てるということがどんなに恐ろしい罪か。彼らの先祖たちは、約束の地カナンに入ったときに既に教えられていました。ヨシュア記 24 章 20 節にこうあります。「**あなたが主を捨てて異国の神々に仕えるなら、あなたがたを幸せにした後でも、主は翻って、あなたがたにわざわいを下し、あなたがたを滅ぼし尽くす。**」

これは、イスラエルの民が約束の地に入ったばかりの時に語られたことばです。約 800 年も前にちゃんと警告されていたのです。もし主を捨てて他の神々に仕えるなら、あなたがたを幸せにした後でも、あなたがたにわざわいを下し、あなたがたを滅ぼすと。それがアッシリヤ捕囚によって、またバビロン捕囚によって実現することになります。

主を捨てるということは最悪のことです。これ以上の罪はありません。これ以上の害はありません。南王国ユダの人たちは、これを、身をもって知ることになります。主を捨てるとはどういうことなのかを。信仰から離れてこの世の神に身をゆだねることがどんな弊害をもたらすことになるのか、この世の流れに従って行くことがどんなに悪く、苦々しいことなのかを知るようになるのです。

それは具体的には律法を守られないこと、主のみことばを守らないことです。主のみことばに従わないことです。主を捨てるとは、すなわち、主のみことばに従わないことなのです。このように考えると、これは何もエレミヤの時代のユダの民だけの問題ではありません。これは私たちにも問われていることです。というのは、私たちは主のことばに従わないことが多いから

です。私たちはしょっちゅう主を捨てていることになります。ですから、これは私たちとかけ離れた問題ではないのです。むしろ、日常茶飯事に犯している罪と言えるでしょう。いったい何が問題だったのでしょうか。

12 節をご覧ください。ご一緒に読みましょう。「さらに、あなたがた自身が、自分たちの先祖以上に悪事を働き、しかも、見よ、それぞれ頑なで悪い心のままに歩み、わたしに聞かないでいる。」

ここには「自分たちの先祖以上に悪事を働き」とありますが、これは、ヒゼキヤ王の子マナセから始まった偶像礼拝のことを指しています。マナセ王はこのエレミヤの時代から 50 年ほど前に南ユダを治めた王ですが、南ユダ史上最悪の王でした。彼についてはⅡ歴代誌 33 章 1～9 節にあるので後で確認していただけたらと思いますが、主がイスラエル人の前から追い払われた異邦の民の忌みきらうべきならわしをまねて、主の目の前に悪を行ないました。しかし、このエレミヤの時代のユダの民は、そのマナセよりも悪事を働いていたのです。もう手のつけようがありませんでした。しかも、頑なで悪い心のままに歩んでいました。つまり、問題は彼らの心だったのです。頭の問題ではなく心の問題です。これが主に聞き従えなくしていたのです。英語の KJV(King James Version: 欽定訳聖書)では、この頑な心を「imagination」(イマジネーション)と訳しています。「思い」ですね。ハート(心)というよりイマジネーション(思い)です。これがいろいろな情報によって歪められて偶像化し、一つのイメージが出来上がり、結果、神から離れていくようになり、主を捨てることになりました。主のみことばに聞き従いたくないのも、問題はこの心が頑なだったからです。だから、パウロはローマのクリスチャンたちに何と勧めたかという、この思いを一新しなさいと言いました。ローマ 12 章 1～2 節です。「1 ですから、兄弟たち、私は神のあわれみによって、あなたがたに勧めます。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、聖なる生きたささげ物として献げなさい。それこそ、あなたがたにふさわしい礼拝です。2 この世と調子を合わせてはいけません。むしろ、心を新たにすることで、自分を変えていただきなさい。そうすれば、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に喜ばれ、完全であるのかを見分けるようになります。」

ここでは「心を新たにすること」とありますが、それはこの「思いを新たにすること」「思いを一新すること」です。思いを一新することによって、神のみこころは何かを知ることができま
す。神に喜ばれることは何か、何が完全であるのかを見分けることができるようになるのです。
その助けになるのが神のことばです。神のことばによって私たちの思いが一新することによっ
て、そこから良いものが生まれてくるからです。

あなたの心はどうでしょうか。石のように頑な、頑固になっていないでしょうか。へりくだっ
て神のことばを聞き、心と思いを一新させていただきましょう。そうすることで主のことばに
従うことができるようになります。主を捨てるのではなく、主を愛する者になるのです。

Ⅱ. 第二の出エジプト(14-18)

次に、14～18 節をご覧ください。16 節までをお読みします。「14 それゆえ、見よ、その時
代が来る—主のことば—。そのとき、もはや人々は『イスラエルの子らをエジプトの地から連れ
上った主は生きておられる』と言うことはなく、15 ただ『イスラエルの子らを、北の地から、彼
らが散らされたすべての地方から上らせた主は生きておられる』と言うようになる。わたしは
彼らの先祖に与えた彼らの土地に彼らを帰らせる。」

エレミヤはこれまで行動預言を通して南ユダの真っ暗な闇を預言してきましたが、ここで希
望を語ります。14 節の「それゆえ、見よ、その時代が来る。」とは、希望的未来預言を語る時の
ことばです。エレミヤ書にはこの表現が 15 回出てきます。ここでエレミヤはどんな希望を語っ
ているのでしょうか。その後こうあります。

「そのとき、もはや人々は「イスラエルの子らをエジプトから連れ上った主は生きておられる」
と言うことはなく、」

どういうことでしょうか。「そのとき」とは、イスラエルの子らがバビロンから解放されるとき
のことです。バビロンから帰還させられる時です。そのとき、もはや人々は「イスラエルの子ら
をエジプトから連れ上った主は生きておられる」と言うことはありません。なぜ?なぜなら、そ
のときは、あの出エジプトの出来事と比べることができないくらい偉大な出来事だからです。

皆さん、出エジプトといったらものすごい出来事でした。イスラエルの民は 400 年もの間エジプトの奴隷して捉えられていましたが、主はそこから彼らを救い出してくださいました。それが出エジプトの出来事です。すばらしい主の救い、解放の御業を成されました。エレミヤの時代から遡ること約 900 年前のことです。

しかし、これから主が成そうとしていることは、その過去の偉大な出エジプト以上の、それをはるかにしのぐ解放の御業なのです。15 節には、それがこのように表現されています。「**ただ『イスラエルの子らを、北の地から、彼らが散らされたすべての地方から上らせた主は生きておられる』**と言うようになる。わたしは彼らの先祖に与えた彼らの土地に彼らを帰らせる。」「北の地から」とは、もちろん北海道のことではありません。バビロンのことです。彼らはバビロンに捕囚の民として連れて行かれることとなりますが、その 70 年の後に、主はそのバビロンから彼らを連れ上り、彼らの先祖たちに与えた土地に帰らせるというのです。そのとき彼らは、何と言うようになるでしょう。彼らは「イスラエルの神、主は生きておられる」と言うようになります。

ですから、これはバビロンからの帰還の約束が希望として語られているのです。それほど偉大な出来事であると。彼らがバビロンに捕え移されたのは、永遠の悲劇ではありませんでした。この悲劇は、悲劇として終わりません。絶望で終わりません。希望で終わるものだと言っているのです。この希望があまりにもすばらしいので、かつてイスラエルの子らがエジプトから救い出されたあの大きいなる救いの出来事、出エジプトでさえ色あせてしまうほど、すばらしい出来事なのです。ですから、これは第二の出エジプトと言えるでしょう。でも新約時代に生きる私たちにとっては、それすら大したことではありません。なぜなら、私たちはイエス・キリストによる罪からの解放を知っているからです。これこそ真の第二の出エジプトなのです。それと比べたらあのモーセによる出エジプトも、第二の出エジプトと言ってもいいこのバビロンからの解放も大したことではありません。それはただのひな型にすぎないからです。イエス・キリストによる罪からの救いこそ、出エジプトの究極的な出来事なのです。これ以上の救いの御業はありません。

しかし、エレミヤの時代においては、出エジプトの出来事はすごいことでした。偉大な出来事

だったのです。でもバビロンからの解放、バビロンからの救いはもっとすごかった。それは出エジプトの記憶が薄れ、民は「イスラエルの子らを北の地から、彼らが散らされてすべての地方から上らせた主は生きておられる」と言うようになるほどの偉大な御業だったのです。つまり、あの時もすごかったけど、このときの方がもっとすごいということです。

アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神は、あなたの神でもあります。その神は今も生きておられます。その神はあなたのために十字架で死なれ、三日目によみがえられることで、あなたをすべての罪から解放してくださいました。その方は今も生きておられるのです。今あなたを生き地獄からも救ってくださいます。あなたを罪の束縛から、バビロン捕囚から解放してくださいます。何というすばらしいことでしょうか。その希望がここで語られているのです。

皆さん、将来への希望があるなら、人はどんな苦難をも乗り越えることができます。あなたはどのような希望を持っていますか。神様はあなたにもこの希望を与えておられます。あの出エジプトの出来事よりもはるかにすばらしい救いの希望、イエス・キリストの十字架と復活によってもたらされた永遠のいのちの希望です。この希望は失望に終わることはありません。なぜなら私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。今世界が一番必要としているのは希望です。神はその希望をあなたに与えてくださるのです。希望がないわけではありません。確かに希望はあります。問題は希望がないことではなく、希望を失っていることです。希望を失っている人々があまりにも多いということです。神様はここでイスラエルに回復の希望を語られました。私たちもイスラエルのように罪のゆえにバビロンに捕えられるかもしれませんが、しかし、覚えておいてください。それはあなたを永遠の罪に定めるためではないということを。永遠の罪に定めるための悲劇ではないのです。この悲劇は悲劇で終わらないのです。この悲劇は希望で終わるものなのです。それを経験するときあなたもこう言うようになるでしょう。「主は生きておられる」と。

しかし、その前に、罪に対するさばきが行われなければなりません。16～18節にそのことが記されてあります。「16 見よ。わたしは多くの漁夫を遣わして一主のことば一彼らをつまみえさ

せる。それから、わたしは多くの狩人を遣わして、あらゆる山、あらゆる丘、岩の割れ目から彼らを抑えさせる。17 わたしの目は彼らのすべての行いをしているからだ。それらはわたしの前で隠れず、彼らの咎もわたしの目の前から隠されはしない。18 わたしはまず、彼らの咎と罪に対し二倍の報復をする。彼らがわたしの地を忌まわしいものの屍で汚し、忌み嫌うべきことで、わたしが与えたゆずりの地を満たしたからである。」

神様は敵をあらゆる場所に送り込み、彼らを用いてさばきを行います。その様が、漁夫が網を打ってさかなを捕るさまと、狩人が獲物を獲るさまにたとえられています。神のさばきを免れる者は一人もないということです。アッシリヤとかバビロンはその道具として用いられるわけです。人は種を蒔けば、その刈り取りをするようになります。しかし、忘れないでください。そんな者でも神様は救ってくださるということを。それで終わりではありません。そこからの回復の希望があります。神のあわれみは尽きることはないのです。

Ⅲ. 異邦人までも主を知るようになる(19-21)

最後に、19～21節をご覧ください。「19 「主よ、私の力、私の砦、苦難の日の私の逃げ場よ。あなたのもとに、諸国の民が地の果てから来て言うでしょう。『私たちの父祖が受け継いだものは、ただ偽りのもの、何の役にも立たない空しいものばかり。20 人間は、自分のために神々を造れるだろうか。そのようなものは神ではない』と。」21 「それゆえ、見よ、わたしは彼らに知らせる。今度こそ彼らに、わたしの手、わたしの力を知らせる。そのとき彼らは、わたしの名が主であることを知る。」

これは、驚くべき神のあわれみの宣言です。イスラエルの民の回復が、異邦人の回心、異邦人の救いにつながるということが語られています。19 節の「諸国の民が」は、異邦人を指しています。イスラエルの民がバビロンから解放されるのを見た異邦の民が主のもとにやって来てこう言うようになるのです。「私たちの父祖が受け継いだものは、ただの偽りもの、何の役にも立たない空しいものばかり。人間は、自分のために神々を造れるだろうか。そのようなものは神ではないと。」すごいですね。異邦人が自分たちの偶像礼拝の空しさ、愚かしさに気付いて、本

物の神、生きている神に立ち返るようになるということです。

「私たちの父祖が受け継いだもの」とは、偶像のことです。それはただの偽りのもので、何の役にも立たない空しいものだ、そのようなものは神ではない、と言うようになるのです。

日本人であれば、父祖から受け継いだものに仏壇がありますが、これは徳川時代に押し付けられたものにすぎません。すべての家には檀家制度が強いられ、そして寺請制度によってどの家にも仏壇が置かれるようになりました。どの家でも死者が出たら仏式で葬式を行わなければならないようにしてキリシタンを締め出そうとしたのです。ただそれだけの理由で強制的に置かれたのです。信仰なんて全く関係なく、先祖たちから受け継いだものにすぎません。形だけです。しかも「仏様」はご先祖様ではありません。仏様とは本尊のことです。ですから、仏壇に手を合わせるというのは、先祖に手を合わせるのではなく、そこに祀られている仏様、本尊に手を合わせることなのです。しかし、その本尊は息のないただの偶像にすぎません。仏壇を大切にしないのはご先祖様を大切にしないことというのは嘘です。お坊さんに聞いてもらうとわかります。そこにご先祖様なんて祀られていませんから。それはただの偽りもの、何の役にも立たない空しいものであり、そのようなものは神ではありません。

エレミヤの時代、そうした周辺諸国の民、異教徒たちが、イスラエルがバビロンから解放されたという驚くべき事実を知り、真の神を求めるようになります。

イスラエルの民は自らの悪い心のゆえに主を捨て、偶像礼拝をし、その結果、神にさばかれてすべてを失い、祖国を失い、バビロン捕囚の民となりました。でも、そのバビロンで 70 年という期間が終わったとき、驚くべきことに、主は彼らを解放し、祖国に帰してくださいました。神様しかできない御業を成されたのです。

そして今度は、それを目の当たりにした周辺諸国の民はただ驚き、本当にイスラエルの神は生きておられる。自分たちの偶像はこの神と比べたら何の役にも立たないただの造形物にすぎない。しかしイスラエルの神はそうではない。祖国を失ったイスラエルをバビロンから解放し、彼らの土地に帰らせてくださった。これは神にしかできないこと。まさに神業です。イスラエルの主は生きておられる、と認めたのです。皆さん、これが生きた証です。

主はあなたを通してこのような生きた証をなさりたいのです。主はなぜ私にこんな仕打ちをされるのか。なぜこんなにつらい目に遭わせるのか、なぜこんな厳しい扱いをされるのか、とすることがあるかもしれません。でも、そのようなことを通してまだイエス様を知らない周囲の人たちが、「主は生きておられる」と言うようになるのです。彼らも、自分たちが信じてきた、すがって来た、先祖たちから受け継いだものが空しいものばかり、何の役にも立たないと言うようになります。神は本当にいらっしゃる。聖書の神は本物だということになるのです。そのような驚くべき主の御業が、あなたを通してもなされるのです。ハレルヤ！素晴らしいですね。それが自分の罪の結果通らざるを得なかった悲惨な生涯であっても、です。また、クリスチャンであるがゆえに理不尽な扱いを受けたものであったとしても、です。どのような形であれ、主はそれを用いてあなたを生きた証人とし、あなたの周りの人たちが神を知るようにしてくださるのです。神様のご計画は何と素晴らしいでしょうか。そのために主はあなたをちゃんと守ってくださいます。捕囚から解放に至るまであなたを捉えていてくださいます。その苦しみを乗り越えさせてくださる。だからあきらめないでください。捕囚になったらもうだめだ、もう絶望だと言わないでください。主の前にへりくだって、この捕囚はいつか必ず終わるんだ、こういう辛い時がいつまでも続くことはない信じていただきたいのです。

有名な I コリント 10 章 13 節のみことばにこうあります。「あなたがたが経験した試練はみな、人の知らないものではありません。神は真実な方です。あなたがたを耐えられない試練にあわせることはなさいません。むしろ、耐えられるように、試練とともに脱出の道も備えていてくださいます。」

アーメン！神様はあなたを耐えられない試練に合わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えられるように、試練とともに脱出の道も備えていてくださいます。素晴らしいですね。それは気休めで言っているものではありません。きょうのみことばにあったように、神様はもう既に先取して回復の希望を御言葉の中でちゃんと約束しておられるからです。ですから、私はこれを信じますと、受け入れるだけでいいのです。それが自分の招いたことであろうと、そうでないものであろうと、どちらにしても、主は最後まであなたが耐えられるように守ってください

ますから。最後まで通り抜けることができるように、最後まで乗り越えることができるように、最後まで打ち勝つことができるように、ちゃんと取り計らってください。その後で、私たちは変えられて金のように精錬されて出て来て、主の生きた証人とされるのです。あなたを見る者が「主は生きておられる」と言うようになります。偶像礼拝をしていた異教徒が「イスラエルの主はまことの神だ」といつの日かそう信仰告白する日がやってくるのです。

主はあなたにあの出エジプト以上のことをしてくださいます。それは救いの喜びに戻ってくるどころじゃない、さらなる喜びで増し加えてくださいます。あなたを罪から救ってくださった主は生きておられます。そして今もあなたを通してすばらしい御業を成しておられると信じて、このみことばの約束、回復の希望に堅く立ち続けていきたいと思えます。